■臨床最前線

研究・手術で培った経験を地域医療に
理念を核にしたクリニック経営
―学生講義、研修医の学外研修支援など多方面で―

医療法人 しらつち耳鼻咽喉科
院長 白土（しらつち） 秀樹（ひでき）
〒811-1344　福岡市南区三宅三丁目16-26　TEL:092-554-8717
URL：https://shirajibi.com/

はじめに

美蕾読者の先生方、はじめまして。私は、福岡市南区・しらつち耳鼻咽喉科の白土秀樹です。これまでこのコーナーに登場されてきた多くの素晴らしい諸先生方には遠く及ばず「臨床最前線」というにはおこがましいのですが、研修医時代からずっと楽しく拝見してきた本誌からのご依頼ですので、少しでもお役に立てればと記事を書かせていただくことにしました。

ご承知の通り、美蕾は全国の耳鼻科医なら誰もが知っている雑誌で、またこのコーナーもあまりにも有名で、実は私も研修医の頃からずっと「愛読者」でした。私も開業する前には多くの号のこのコーナーを熟読した記憶があります。今回も「将来開業する全国の後輩に少しでも参考になれば」との思いで私の経験について筆を執らせていただきます。

クリニック概要

当院は、平成28年11月１日に、福岡都心部を流れる那珂川沿いの福岡市南区三宅にご縁があって開院させていただきました、もうすぐ満５周年のまだまだ若いクリニックです。当院の特徴は、まずはそのロケーションです。

８年前に完成した幹線道路の「みらい大橋」と那珂川桜並木に接しており、春には桜の写真を撮影する家族連れが多く見られます。その桜がクリニックの大きな窓から見えるように、建築士さんと幾度も院内動線を変更設計したことで、春には中待合室の窓から圧巻の桜を眺めることができます。秋には北の大窓から“京都の紅葉”が見えるように配置し、圧迫感を無くすため採用した高い天井は開放感に溢れ患者さんにも好評です。後に述べますが、実はこ

外観

クリニック大窓から見える満開の桜

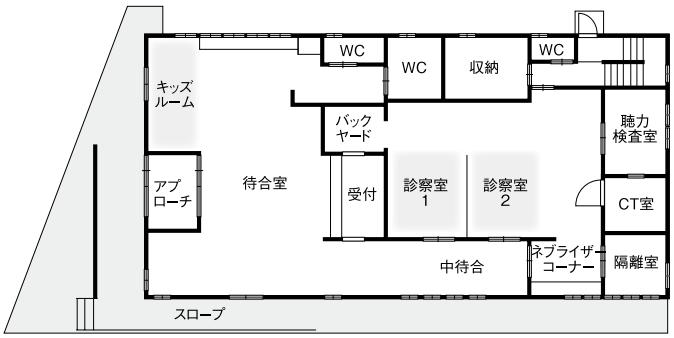
パステルカラーに統一した待合室

明るく広々としたキッズルーム

の医院の設計は私の過去と大きく関係しています。

また、院内の色調は優しい感じのパステルカラーを基調とし、来院する子育て世代のお母さんとこどもに配慮してキッズルームを充実させました（コロナ禍の現在、おもちゃ、絵本は撤収しています）。

専門外来として、腫瘍外来（院長）、小児耳鼻咽喉科専門外来（菊池奈美先生）、舌下免疫外来、ＣＴを用いた難治性副鼻腔炎外来があります。週２日だけが２診制、水曜日と土曜日は午前診察のみです。



院内見取り図

自己紹介

福岡生まれの京都育ち、出身高校は京都のカトリック学校である洛星高校で、同級生に京大の山本典生先生と神戸大の山下大介先生がいます。幼少時、父は京都で呉服店を営んでおり、多くのお客さんが家に遊びにくる環境でした。事あるごとに客人に“ごあいさつ”するように言われてきましたので、結果として新しい人との出会いが大好きになりました。これは、医師になった今でも大きく役に立っています。

また、そのころから重度の喘息を患い、近所の小児科に吸入で通い詰めでした。歩くとつらいので、母におぶってもらって通院した記憶がかすかにあります。現在は閉院されましたが、東寺五重塔の近くにあった小さな小児科医院は、おじいちゃん先生とその奥さんのお二人でされていましたが、夜間でも吸入を受けさせてくださるとても温かみのある診療所でした。そこで私も自然と「医師になって患者さんの役に立ちたい」と強く思うようになりました。

ただ、親戚に医師を含め医療関係者がいなかったため、なかなか医師という職業に馴染みがない状況でした。一度は工学部建築学科を受験しましたが、身内が癌になり、どうしても医師になりたい夢が捨てられず、迷いながらも浪人して両親の故郷・福岡の九大医学部に進学しました。

一度は建築士を目指したことで、将来自分のクリニックを持つ時は設計に必ず関わろうと思っておりましたので、開業時には工務店さんの建築会議には毎回参加、そこで「より患者さんにとって良い設計とは何か」を考えました。愛読書の建築専門誌『医院建築』のバックナンバーはほぼ全て読みました。初めは高校の同級生で有名な建築家にお願いしようと思っていたのですが、予算が全く合わず自分で設計することにしました。

大学･勤務医時代

卒業後に入局した九州大学の耳鼻咽喉科は115年の長い歴史がありますが、初代・久保猪之吉教授時代から一貫して、「研究の視点を持った臨床医」を育成する伝統があります。私の尊敬する先輩方からも、「専門性を大事にして臨床の問題点を深く研究する」「新しい知見はすぐ論文に！」という環境で教育を受けてきました。

入局後は小宮山荘太郎教授のご指示で九州大学大

シンポジウムでの発表スライド（2015年、第28回日本口腔・咽頭科学会）

学院形態機能病理に進学し、当時まだまだ貧弱だったＰＣＲを駆使し、腫瘍悪性化の分子病理学的なメカニズムについて朝から夜まで研究を行いました。私は恥ずかしながら筆が遅く論文は苦手でしたが、専門の頭頸部癌手術は長時間ながらも繊細かつダイナミックでとても魅力的でしたし、臨床病理の研究も外科治療に直結して、とても興味が尽きませんでした。特に耳下腺癌悪性度診断システムについては、「耳下腺腫瘍の術前診断～組織学的悪性度推測の手がかり～」と題して、大阪医科大学（現、大阪医科薬科大学）河田了教授主催の日本口腔・咽頭科学会のシンポジウムにて発表する貴重な機会をいただいたことは、一生の思い出になりました。

関連病院である国家公務員共済組合連合会浜の町病院に部長として赴任してからは、小さいながらも組織のリーダーとしてどのように病院に貢献できるかに苦心するという貴重な経験をさせていただきました。仲間とダイナミックに手術をすることもとても魅力的でしたが、多くの患者さんと接するうちに小児科の“あの先生”が脳裏をよぎるようになりました。初心に帰り、より患者さんに寄り添う地域医療を行いたいとの思いが強まった末、大学生活14年目、医師になって20年目の時に開業を決意しました。まさに医師を志望した原点に戻った感じです。

クリニック診療で大事にしていること

「研究の視点を持った臨床医」として、ありきたりですが患者さんに治療上どのようなことが大事かをきちんと説明し、エビデンスに基づいて患者さんと一緒に“最適な治療”を選択できるように力を入れています。また、大学・関連病院では頭頸部癌を専門にし、頭頸部がん治療認定医・指導医とがん治療認定医の資格を取得していましたので、火曜日午後に頭頸部腫瘍外来を開設し、地域の患者さんに安心を与えられるように配慮しています。

開設時にＣＴ、エコー、電子ファイバースコープを完備し腫瘍外来を開くと心に決めていましたが、ＣＴ導入については予算面から随分迷いました。診断面では頸胸部造影ＣＴができれば言うことないのですが、それは人的にも安全面・予算面からも非常に厳しいと判断、顔面・頸部の単純ＣＴのみに留めました。幸い近隣に福岡赤十字病院や九州中央病院などの基幹病院があり、疑わしい時は撮影依頼できること、また撮影頻度も多くないことからです。

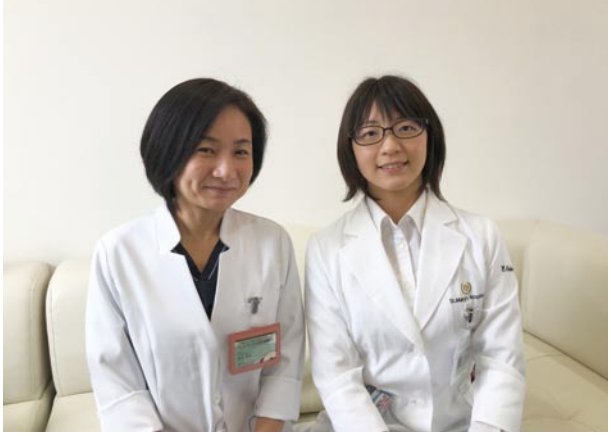
開業する際に大切なのは「どこに重点を置き、何を切り捨てるか」ということだと思います。地域・キャリア・専門などさまざまな要因が絡んでくると思いますが、予算的に全てを叶えるのは難しいのではと感じています。ちなみに聴力検査・めまい関連機器は、ごく標準のものを揃えました。また安全・感染対策にも力を入れており、コロナ禍の現在、一部改装し動線を分離することで、入り口を別にする

白を基調とした診察室

副鼻腔炎診断に威力を発揮するCT

新設した発熱外来スペース

九大での学生講義


見学の研修医の先生を迎えて
（左は菊池先生）

発熱外来を新設しました。

当院のある福岡市南区は、西鉄の特急停車駅・大橋駅を擁し、ベッドタウンとしてこどもの数も多い地域です。小児耳鼻咽喉科のニーズも大きく、山口で小児耳鼻咽喉科・耳疾患を専門にしていた九大同期の菊池奈美先生に、小児耳鼻咽喉科・難治性耳疾患専門外来を週１回お願いしました。ちょうど前述の頭頸部腫瘍外来を２診で私が担当でき、専門性を高める意味でも地域のお役に立っていると思います。

医学教育･臨床研究 ～臨床教授として～

現在も九州大学教授・中川尚志先生からのご指示で、九大医学部４年生に唾液腺・口腔咽頭疾患について系統講義を担当させていただいています。日々最新知識をアップデートする必要があり、さまざまな先生にご指導いただき緊張の連続です。

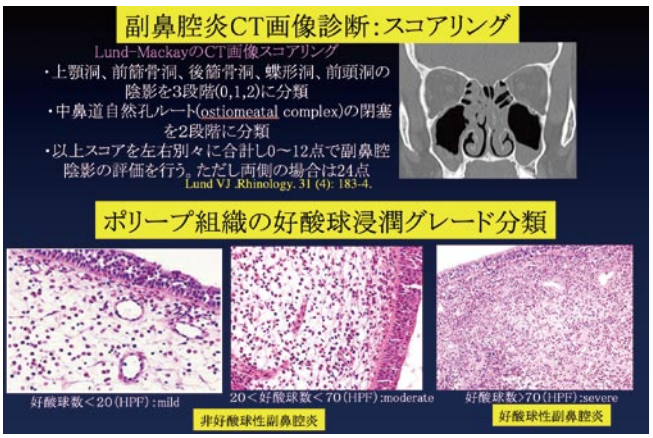
また、耳鼻科をローテーションするクリニカル・クラークシップの６年生や耳鼻科ローテーション中の研修医の先生方で、希望される方には母教室からの依頼があれば、学外研修として当院でクリニック医療を実際に体験してもらっています。大学や基幹病院で見る耳鼻咽喉科は“頭頸部外科”の意味合いが強すぎて、実際に耳鼻咽喉科クリニックの外来診療がイメージできないからです。

そのため耳鼻科入局には迷いがある場合も多いのですが、当院へ見学に来られた研修医の先生から、合計８人の入局者が出たのは、医局長時代からの元“勧誘隊長・学生係・飲み会担当”としては非常に嬉しいことです。

また、他分野では現在、西南学院大学人間科学部児童教育学科と香蘭女子短期大学ライフプランニング総合学科で、「医療におけるこどもとお母さんへの関わり方」について非常勤で講義を担当させていただいています。こうした異分野の講義は、準備こそ大変ですがやりがいも多く、ほかにも、「こども学設立のための協議会」に科学研究費共同研究者として参加させていただいており、今後もお声がかかる限り少しでもお役に立てればと思います。

クリニックを開業してしばらくは、同じ疾患の繰り返しで、ともすれば漫然と患者さんに接してしまうことがあると思いますし、私も実際そうでした。しかし、毎日アレルギー性鼻炎を診療していると、患者さんの要望がさまざまであることに気づきます。

当院では若い方の舌下免疫療法を数多く手がけている関係で、舌下免疫の有効性と臨床面での相関について現在臨床研究を行っています。また、好酸球性副鼻腔炎におけるＣＴと病理組織を用いた臨床病理学的研究を継続しています。今後クリニックから何らかの情報を発信していけるように症例を蓄積できればと思っています。



好酸球性副鼻腔炎に関する臨床研究

スタッフとの関わり

全ての開業医の、共通かつ最大の悩みはずばり、スタッフに関することと思います。良い医療を提供するにはスタッフの力が最も重要だからです。当院では開院以来、さまざまなトラブルをスタッフ全員で乗り越えてきました。

その一つの柱となったのが、理念による経営です。開院までにやるべき最も大切なことは「開業の目的をはっきりさせること」との先輩からの助言で、全てに先んじて当院の理念をじっくり決めました。

信頼できる広告のプロにもお手伝いいただきロゴにも意味を持たせ、理念をそこに凝縮させました。ロゴマーク『おやこあら』は、お母さんコアラがこどもコアラをおぶっていますが、これが「こどもとお母さんに優しい医療」という当院理念のシンボルとなっています。

何か問題が起きた時の話し合いでは、いつも「理念に照らし合わそう」とスタッフに声をかけてきました。理念浸透はまだまだですが、ともすれば裸の王様となってしまう院長という立場に、少しでも客観性を持たせることができたのではと思います。

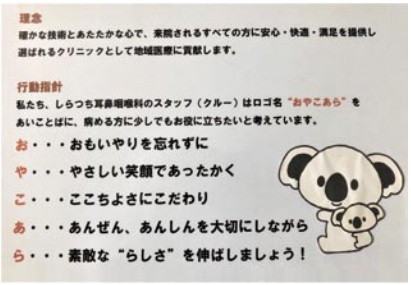
院内イベントは、現在のコロナ禍で実施するのはなかなか難しいのですが、安全・感染・接遇に関するスタッフの知識向上に向けた夏の職員講演会、地域に開かれたクリニックを目指した「こどもクリニック」、忘年会および記念式典（記念講演・職員表彰を含む）を行ってきました。特に安全対策には力を入れており、令和２年度は佐賀大学救命蘇生学教授の井上聡先生をお招きし、スタッフに対して蘇生人形を用いた医療安全講習を行いました（写真）。

そのほか、働きやすい職場への取り組みとして、スタッフのリーダー制を導入し、安全・感染・接遇・院内デコレーションなどの責任者を決め、権限を譲ってスタッフが自主性を発揮しやすくしています。また、医局長として研修医・学生教育で培ってきたノウハウを生かし、新規採用スタッフへのプリセプター制度と研修システムを今年度構築しました。そして、お互い普段なかなか言えない“ありがとう”をカードに込めて土曜日に贈り合う「サタデーオベーション」も実施しています。

社会活動としては専属の編集委員とスタッフからなる編集会議を行い、『おやこあら新聞』という機関紙を不定期ですが作成し、地域に発信しています。

おわりに

医師としてのキャリアパスはあまりにも多彩ですが、大きく分けると「大学人として研究する」「手術を含めた臨床を続ける（勤務医）」「クリニックを開業する」になる



理念を表したロゴの『おやこあら』

院内接遇研修

実技を伴った医療安全講習

3周年記念式典にて(職員家族や関連施設スタッフとともに)

こどもクリニックのイベント

と思います。それぞれ個人の適性があり、どれも魅力的な進路と思うのです。

これまで臨床最前線に登場された“クリニックでも手術を継続する先生方”は私の理想で、本当に羨ましく思いますが、私の得意とする頭頸部癌に限れば、手術をクリニックで続けることは全ての点からクリニック業務と相性が悪いと思います。

では、私のクリニックでできる強みは何かと考えた時、おこがましいようですが、「専門性をもって丁寧に説明すること」と「人を育てること」ではないかと思い至りました。

前者に関しては、人と接するのが好きな性格ですので、最新のＥＢＭに基づいた丁寧な医学的説明を患者さんに適切に行うことだと思います。本当に当たり前のことですが、患者さんは何を求めてクリニックに来られているかをいつも考え、独断にならない範囲でできるだけ客観的な診断・治療をきちんと説明するように心がけています。そして私の範囲でできないことは、患者さんのためにも躊躇しないで適切に他院に紹介する姿勢を貫こうと思います。

そして後者は、関わらせていただける限り、若い先生や学生さんに「クリニック医療の素晴らしさ」についてお伝えできればと思います。たくさんの方と接することで私も刺激を受け、勉強になり新しい目標もできますので、少しでも誰かのお役に立てるなら少しずつ続けていこうと思います。

最後に、九州大学勤務時代に研究・教育について熱く導いてくださった名誉教授の小宗静男先生、現在も大学との関係を保ち、研究・教育に関わる機会を与えていただいている現九州大学教授の中川尚志先生に厚くお礼申し上げます。

満開の桜をバックにスタッフと

また、病理研究・手術の恩師で現在でもご指導いただいている平川直也先生、大学で臨床研究を温かくご指導いただいた中島寅彦先生をはじめとした九大耳鼻科の諸先輩方、開業医の先輩として現在専門医会でご指導いただいている日本臨床耳鼻咽喉科医会会長の福與和正先生、仕事のできない私を温かく見守ってくださる福耳会会長の村塚幸穂先生、五孔会会長の末吉誠一先生、同副会長の嬉野元喜先生、当院耳外来・小児耳鼻咽喉科外来を担当してくださる菊池奈美先生、いつも相談できる大学同期の安達一雄先生、そして何より患者さんを紹介しても嫌な顔一つ見せず手術をしてくださる九州大学耳鼻咽喉科同門の先生のお陰で何とか頑張れております。

この場をお借りしてお世話になっている全ての先生方に心から御礼申し上げます。まだまだ未熟ですが今後もご指導のほどよろしくお願い申し上げます。読者の皆様も、何かご質問があれば、遠慮なく冒頭のメールアドレスまでご連絡いただければ望外の喜びです。